

## 山伏と天狗 ー九州の山岳信仰からー

角脇 悠花

(堀田 穰ゼミ)

### はじめに

本論文では、天狗と山伏についてなどを九州の英彦山を例にとり、聞き取りを行った。

このテーマに設定した理由は、筆者は妖怪に興味があったからである。地元である福岡県には天狗の伝承などが存在している英彦山があり、そこはかつて修験道が栄えていた。英彦山を調べていくうちに、修験道の山伏と天狗が関係しているという話を聞いたため、テーマを山伏と天狗に設定した。

### 第一章 英彦山、修験道、天狗について

#### 第1節 英彦山

英彦山は昔、日子山と表記されており、一七二九年に靈元上皇の院宣によって現在の英彦山と表記されるようになった。修験道の山として栄え、全盛期には僧坊三八〇〇を数え、信仰は九州全域に及んだとされ、大峰山・羽黒山と並んで三大修験道場とされていた。

英彦山はどのようにして開かれた山なのかを記す、彦山開山伝説というものがある。

その一つは、彦山権現はもともと古代インドのマガダ国という所にいたが、東方の人々の幸せをはかるため、どこに行けば良いのかを知るために五本の剣を投げ、豊前国田河郡大津邑に来る。この時に彦山権現は、香春岳という山の香春明神に泊めてほしいと宿を頼んだが、狭いことを理由に断られてしまう。このことに怒った彦山権現は、金剛童子たちに香春岳の木を引き抜くよう命じたので、香春岳は岩石が露出した樹木が少ない山肌になったとされる。その後、英彦山にやって来て、地主神であった北山三御前は住む所を譲った(576年)。彦山権現は水晶石を御神体としていたが、般若窟の上にマガダ国から投げた剣を見つけ、

四九窟に御神体を分けてその守護のために金剛童子たちを置いた。また、彦山三峰には法体、俗体、女体の三所権現が神の姿で現れた。それから彦山権現は、82年後に伊予国石鎚峰に第二の剣を見つけてそこへ移り、その後も他の剣を見つけ山を移っていったが、最終的には英彦山に帰ってきた。

この話は、英彦山に関する最も古い書籍の『彦山流記』に記載されている。

第二は、英彦山の開祖は中国魏国の人善正法師である。普泰の年(531年2月～532年4月)に太宰府に来て仏法を広めようとしたが果たさず、光が日子山に射しているのを見て、山中の岩窟にこもって時機が来るのを待った。この頃に豊前国日田郡に藤原恒雄という者がいて獵をよく行っており、獸を追って山に入った時に、岩窟に座している善正を見て何をしているのか聞いたが言葉が通じなかった。善正も殺生の罪を話す通じず、恒雄は獵を続けていた。そのうち恒雄は善正の姿を見ているうちに信心の気持ちが起こり、窟のそばに小屋を作って住むようになり、それ以降二人は親しくなった。ある日、恒雄は1匹の白い鹿を見つけて瑞獸と知らずに弓で射ってしまった。鹿はその場に倒れたが3羽の鷹が飛んできて、1羽が矢を抜き、1羽が羽で傷口を撫でて血をぬぐい、1羽がヒノキの葉を水に浸して鹿に含ませると、鹿は生き返ってたちまちに姿を消してしまった。恒雄はそれを見て神の仕業だと悟り、大いに恥じて弓矢を捨てて家財をなげうって祠を建て、善正が抱いてきた仏像を安置して祀り霊山と名付けた。その後、恒雄は善正の弟子となり修行に励んだ。これが日本における僧の始めとされている。恒雄はぜひ仏様に会いたいと祈ると、北岳に法体を表して「我はもと阿弥陀如来であり、神となって現れた。」と言い、南岳には俗形で釈迦如来、中岳には女容で観世音菩薩が現れた。そのため、三岳の山頂に神祠を建てて祀った。

この話は、『彦山縁起』に記載されている。このように英彦山は開山され、その後、修験道が発展していく。

## 第2節 修験道

修験道とは、山岳信仰をもとに、仏教・道教・陰陽道などの宗教が集合し形成された日本独自の民族宗教である。

宮本袈裟雄によると、修験道が仏教やキリスト教などの成立宗教・創唱宗教などと相違し、地域社会を基盤とする民俗宗教と近似している顕著な点として、次の二点が挙げられている。

その一つは、教祖の問題であり、修験道では役行者(役小角・神変大菩薩)を開祖とするが、これも修験者たちが次第に集結し組織化されるようになるに従って不動の地位を得たものである。各地の山岳に依拠する修験の間では、白山の泰澄、出羽三山の能除大師、日光の勝道上人、英彦山の法蓮などをはじめとして、役行者以外に開祖・開山を求めている場合が多く、そうした開山とされる人物自体も、当時多数の修験者が存在したなかの傑出した人物とみるほうが妥当な見解といえよう。

第二は教義や教理である。一般に教義が神の啓示、神の教えと理解されるのに対し、修験道では他宗教でいうところの教理や教義はなく、修験者自身が修行のなかから体得するところにその本義がある。確かに修験道教義と通称されているものもあるが、しかしそれらの多くは、修験者の修行・衣体・儀礼(修法)・法具などを解説したもので、密教理論によって説かれたものが多いといえよう。(宮本袈裟雄 1989)

とされている。

## 第3節 天狗

日本では日本書紀舒明天皇九年春で、最初に天狗の描写が現れている。

「九年春二月の丙辰の朔戊寅の日に、大きな星、東より西に流る。便ち音有りて雷に似たり。時の人の曰はく、「流星の音なり」といふ。亦は曰はく、「地雷なり」といふ。僧旻僧が曰はく、「流星に非ず。是天狗なり。」

其の吠ゆる声雷に似たらくのみ」とあり、この話では流星を天狗(アマツキツネ)と呼んでいる。

『晋書』にはさらに詳しく書かれており

「天狗。状大奔星か如く色黄にして声有り。其の地に止まるは狗に類す。墮つる所、之を望めは火光の如にして、炎炎として天を衝く。其上鋭に其の下員なり。数頃(すうこう)の田処(でんじょ)の如し。或は曰く、星毛有り。旁に短彗有り。下に狗形者有り。或は曰く、星出る時に其の状赤白にして光有り。下即ち天狗と為す。一に曰く、流星光有り、人面を見る、墜ちて音無し、若し足有れば名づけて天狗と曰ふ。其の色白、其中黄黄として遺火の状の如し。兵を候ひ賊を討たむことを主る。見れば則ち四方相射り、千里に軍を破り、将を殺す。或は曰く、是れ将に闘はむとする人相食む。往く所の郷、流血有りて其の君地を失ふ。兵大いに起こり国政を易ふ。守禦を戒む。営頭、雲有りて崩る山の墮つるか如し。所謂営頭之星の墮つる所、其の下軍を覆す。血を流すこと千里。亦曰く、流星昼隕つを営頭と名づく。」

とある。

大きな流星が飛行し、飛行中発生する大きな音を「天狗の声」とし、地上に落ちてからは、文字通り「狗」則ち「犬」の姿をしているという訳である。結局、大音声と共に天上から落下し、犬の姿で地上に現れるもの、つまり「天から落ちてきた犬」が「天狗」なのである。現在でも、中国で「天狗」といえば、犬の姿をしたものを指すから、天狗の姿は中国では基本的に変化していないのである。



図1 天狗(あまつきつね)

日本書紀以降は文献に天狗の記述は見られず、次に天狗が出現するのは『うつほ物語』である。

「かく遙かなる山に、誰か、物の音調べて、遊び居たらむ。天狗のするにこそあらめ。」すなわち『うつほ物語』では、山中における怪音を天狗の行為としている。山の中で不可思議な音を立てて人間を迷わすものという発想である。

『源氏物語』では、身投げをした浮舟が救われた後、僧都が浮舟発見のいきさつを薫に語る場面で天狗が登場する。

「事の心推しはかり思ひたまふるに、天狗、木霊などやうのもの、あざむき率てたてまつりたりけるにやとなむうけたまはりし。(夢浮橋)」

ここでは、天狗が木霊と並んで登場しており、源氏物語の木霊も基本的には山中や森の中で怪音を発する存在であったこととなる。一緒に出てくる天狗も同様に山中等で怪音を立てる存在であることが第一義となるとされている。しかしこの場面は、浮舟が何者かに連れ去られて来たのではないかと疑っている場面であり、単に怪音を立てるだけではなく、人などを連れ去る行為も行う存在であることが天狗や木霊の性質として当時の人々に理解されていたことになる。うつほ物語や源氏物語に描かれた天狗は、山中や森の中で怪音を発して人を迷わし、あるいは人を浚う恐ろしい存在として描かれていることになり、中国的な意味での流星や犬ではなく、もっと得体の知れない不可思議な存在として理解されていた可能性が高いとされている。

平安後期には烏天狗の出現がみられ、天狗に関して詳しい描写は『今昔物語集』に見出すことが出来る。

「震旦天狗智羅永寿、渡此朝語第二」(巻二十)では

最後に温泉に入る場面は、「極く鼻くて」と描かれ、天狗が異類として悪臭を持っているものとされている。

「天狗、現佛坐木末語第三」(巻二十)では

五条の道祖神の所に生えていた実の成らぬ柿木に佛が出現し、光り輝き、花を降らしたので、人々が集まり騒いだのを、光の大臣と

いう知恵のある人が天狗の仕業と見抜いて、睨み付けたところ、やがて鳶に姿を変えて木から落ち、子供たちにたたき殺される。

「光の大臣、…「実の佛の此く俄に木の末に可出給き様無し。此は天狗などの所為にこそ有めれ。…」…強に守る時に、侘て、忽に大きな屎鵝の翼折れたるに成て、木の上より土に落て□めくを、…小童部寄りて、彼の屎鵝をば打煞してけり。」

ここでは天狗が大きな屎鵝として描かれている点が重要である。鳶が天狗と一体のもの、天狗の姿は鳶であるという見方が、今昔に明確に示されている。



図2 烏天狗

さらに「佛眼寺仁照阿闍梨房託天狗女来語第六」(巻二十)では、翼を持って空を飛び、術を使って女に取り次いで取り付いて仏道を妨げようとする天狗の姿が描かれている。

「龍王、為天狗被取語第十一」(巻二十)では

讃岐の万能の万能の池の龍が小蛇に姿を変え日光浴中、鵝の姿の天狗に連れ去られ、比良山の洞に閉じ込められる。一方、比叡山の僧も連れ去られ、同じ洞に入れられる。僧の所持していた水瓶の水を得て力を回復した龍は洞を蹴破り、僧を乗せ、比叡山に送り届け、自らを連れ去った天狗を探して蹴り殺す。天

狗は翼の折れた屎鷄の姿になった。

「比良の山に住ける天狗、鷄の形として、其池の上を飛び廻るに、堤に此の小蛇の蟠て有るを見て…俄掻き爪て、遙に空に昇ぬ。…天宮、…荒法師の形と成て行けるを、龍降て蹴煞してけり。然れば、翼折れたる屎鷄になむ、大路に被踏ける。」

ここでは天狗が鷄の姿で空から飛来し、人や動物などを浚うものとして描かれている。天狗の姿や行動として、極めて本質的なものと思われる。

共通して言えることは

- ・天狗の本体は屎鷄であって、空を飛行し、動物や人などを浚うものである。
- ・魔縁の存在であって、外術を使い、自らが変身したり物を自在に変形できる。
- ・仏教と対的存在であって、いつも仏道を妨げようと狙っている。

天狗自体は山中に住む修行者的な存在としても描かれており、修行者で墮落したものが天狗になるという発想も見て取れる。

### 烏天狗と山伏の融合

『十訓抄』は

子供に苛められていた古鷄を助けた僧が異様な姿の老法師即ち天狗から、お礼に願いを叶えると言われ、霊鷲山での釈迦の説法の様子を見ることを願い、叶うが、感動して信心を起してはならぬという約束を守れず、信者をたぶらかしたとして護法童子から天狗が羽を痛めつけられる。

という内容である。

ここでは古鷄や老法師が天狗の本性であることが示されており、伝統的な烏天狗と法体の天狗の融合が見られる。

『古今著聞集』の久安四年夏法勝寺の塔上にして天狗詠歌の事（巻十七、変化第二七、五九七）には

「久安四年の夏の比、法勝寺の塔のうへに、夜ながめける歌、われいなばたれ又こゝにかはりむあなさだめなや夢の枕や天狗などの読侍けるにや。」

とあり、ここでは天狗が歌を詠む教養の持ち主たることを示す説話がある。

同じく（六一一）では「伊勢国書生庄の法師上洛の帰途天狗に逢ふ事」で

伊勢の国の百姓である法師が都に行った帰りに天狗に出会って都を引き回され、刀を手放したために、最後には清水寺の鐘楼に縛りつけられてしまう

という内容が語られている。

天狗は山寺法師の姿で途中出会った山隊を恐れているが、その山隊も実は天狗であり、上級の天狗である三人の山隊から、人を騙すことは止めるように言われているのだらうとされている。

ここからは、天狗にも上下関係があり、善天狗・悪天狗がいることが分かる。また、天狗は法体と山隊姿の両方があることが窺える。

『沙石集』によると、天狗には善天狗と悪天狗の二種があり、善天狗は仏法を守り、悪天狗は仏法を妨げるものとされている。これまでの天狗は、仏法を妨げる魔縁のものとしての悪い評価しかなかったが、天狗の性格に仏法を守る善なる存在という新しい意味づけが加わった。

また『平治物語』では、牛若丸の鞍馬山での修行が次のように描かれている。

「昼は終日学問を事とし、夜は終夜武芸を稽古せられたり。僧正ヶ谷にて、天狗と夜な夜な兵法を習ふ。」

これは義経が天狗から兵法を学んだことを記している。

烏天狗と呼ばれるものは、「烏」ではなく「鷲」がその実態であった。なぜそれが「烏天狗」と呼ばれるようになったかと言えば、烏天狗が変化して鼻高天狗が生まれた際に、新しい鼻高天狗に対して、旧来の鷲の嘴と羽を持ち山伏の姿をした天狗の呼称が必要になった。その際、鷲の嘴や羽を烏のものと誤解して烏天狗と呼んでしまったのだらうとされる。

### 鼻高天狗の発生

天狗が鷲の姿をしているというのが平安末期から鎌倉期にかけての一般的な通念であって、鼻の高い赤ら顔の山伏姿の天狗があらわれるのは室町期に入ってからではないかと考えられている。天狗に大天狗小天狗の別があるのは、『源平盛衰記』の住吉神の託宣以来、言われてきた伝えで、室町

末期の頃までの天狗は、みんな背中に羽根を背負った烏天狗の姿であった。

『天狗の草紙』には種々の天狗の像が描写されており、その中で第六巻は、天狗に関する五つの説話から成り立っている。

第一段は、山門の学生が睡眠中にその魂が抜け出し飛行して、寺門の碩学信譽のところへ出掛け、明かり障子から様子を窺うと、不審に思った信譽が小刀で鼻を切りつけたため、鼻をそがれて飛び去る話である。挿絵では学生が鼻を切り取られる場面と、鼻を押さえて鳶の羽を広げて飛び去る場面が描かれている。

鳶の翼を持つのは、この学生が烏天狗として描かれていることを示している。しかしその一方で、嘴ではなく鼻を切り取られている点では、この天狗が鼻の長い鼻高天狗の顔立ちをしていることも示しているように思われる。

鼻高天狗は画像としては、鎌倉時代末期にすでに発生していたと考えられている。しかし、それは天狗の絵としてはまだ一般的なものではなく、通常は烏天狗が天狗の絵として主流を占めていた。実際には画像的にも江戸時代に入っても、烏天狗と鼻高天狗は混在していた事実がある。



図3 鼻高天狗

烏天狗から鼻高天狗への移行はどのような過程を経て行われたのか。従来言われてきたのは次のような説である。

1. 狩野元信が鼻高天狗を創始したという伝説
2. 仏教の守護神カルラ像を基にした。
3. 雅楽の「胡徳面」を基にした。
4. 雅楽の伎楽面全体を基にした。
5. 猿田彦神を参考にした。

鼻高天狗はカルラや胡徳面を元に烏天狗とは別に創造したのではなく、烏天狗の像を受け継ぎ、その一部を変形したのが鼻高天狗ではないのかというのが結論である。

つまり、烏天狗の嘴と鼻高天狗の鼻は連続性を持っており、烏天狗の長い嘴が変化して先端が丸みを帯びて鼻の形になったものが鼻高天狗の鼻ではないかとされている。

実際、既に鎌倉末期の『天狗の草紙』や『是害坊繪』の天狗像に嘴が変化して長い鼻となったと思われる天狗像が見られるし、江戸時代の『高慢齋行脚日記』を見ると、男性の天狗は先端が丸い鼻高天狗と思われるのに、女性の天狗は鼻がとがって、むしろ嘴とした方が適当と思われるくらいである。

次に鼻高天狗が持つ団扇についてである。これも凶像で烏天狗から鼻高天狗への凶像的移行によって説明でき、烏天狗が持っていた、というより背中に生えていた二本の羽は、鼻高天狗になって消滅していく。鼻高天狗はより人間に近い姿へ変身したからであるとされている。すなわち、烏天狗の二本の羽が消えて一本の団扇へと変形したのである。

天狗の特徴として飛行能力が挙げられ、これは鳶の形を取ることによって空中飛行が保証されている。烏天狗は羽を持っていたため、飛行には何の問題もなかったが、鼻高天狗となって羽を失った時点で、飛行をどうするかが問題となる。天狗の特徴の大きなものが飛行であるため、鼻高天狗の場合も空を飛ばなければならず、そのために空を飛ぶ手段が必要だったのである。つまり、羽の代わりに空を飛ぶ手段が団扇だったのである。

団扇が一般化すると新たな意味づけも生じてきた。鼻高天狗は団扇の機能から、団扇によって風

を起こす存在であるという新たな特徴が生まれたのである。(勝保隆 平成 17 年)

以下、表にまとめてみた。

表1 天狗発生の時期

署名	いつ頃か	天狗の形
日本書紀	720 年成立	流星 (アマツキツネ)
晋書	644 年成立	流星のちに犬
うつほ物語	970 年代頃成立	
源氏物語	1004 ~ 1012 年頃成立	
今昔物語集	1110 ~ 1124 年頃成立	烏天狗
十訓抄	1252 年成立	古鴉、老法師
古今著聞集	1254 年成立	山寺法師
沙石集	1283 年成立	善天狗と悪天狗
平治物語	成立年未詳	烏天狗
源平盛衰記	成立年未詳	大天狗、小天狗
天狗草子	1296 年	鼻高天狗
高慢齋行脚日記		男性の天狗、女性の天狗

制作者 筆者

## 第二章 『天狗と修験道 山岳信仰とその周辺』 宮本袈裟雄

宮本袈裟雄によると修験道の組織は、天台系本山派・真言系当山派・諸山(派)の三つに分けることができる。

天台系本山派は聖護院門跡を頂点として、院家・院室・先達・公卿・年行事・御直末院・准年行事・役僧触頭・諸同行などの別に分かれ(「修験十二箇条」)、院家が全国に霞をもち、重要な国に先達、郡に年行事・准年行事をおき同行を支配していたとされるごとく(宮家準「山伏—その行動と組織」)、ほぼ一円支配体制組織をとっていた。一方当山派は、中世には教王山世義寺・吉野桜本坊・内山永久寺・飯道寺岩本院・同梅本院をはじめとする三六正大先達が支配するところであったが、近世

期には一二正大先達に減少し、それに反比例する形で醍醐寺三宝院門跡が抜きでた存在となる。しかしいずれの場合も当山派は大寺支配、袈裟筋支配をとり、なかには修験兼帯と称して真言宗寺院でありながら修験道にも所属している例も少なくない。これら本山・当山両派は熊野三山・大峰山・金峰山を修行の根本道場とし、ほぼ全国的規模で組織をすすめてきた。この二派に対して、諸山(派)とみなされるのは、出羽三山・英彦山・日光山・白山などをはじめ、各地の山岳に依拠する修験集団で、出羽三山や英彦山のごとく修験が一山の支配的立場を保持する場合もあれば、一山組織の一部として修験が位置付けられている場合もある。いずれの場合も本山・当山両派のごとく、山岳を離れて組織されることがなく、あくまで山岳を中心に組織していること、さらには全国的規模での組織化がなされなかった点で、本山・当山二派とは大きく異なっている。

ここに記されているとおり、本稿の英彦山は出羽三山の羽黒山と同じ諸山(派)に属していることが分かる。この各地の山岳に依拠する修験者たちは、修行者としての性格を大きく失った御師として、各地に講社を成立させたり、山岳に対する庶民の信仰を集めるなどの大きな役割を果たしたとされる。

宮本袈裟雄は、出羽三山登拝と里先達を千葉県袖ヶ浦町蔵波の事例を中心として取り上げている。千葉県に存在している講集団は、出羽三山へ登拝することを目的とした集団であり、三山に登拝した行人たちによって組織されている。六十年ぶりの昭和六二年十月に蔵波で行われた、梵天納めについて記されており、行人の腰梵天が供養塚に埋納されたとある。この梵天納めの行事は、この日のために新しい三山碑を建立したり、腰梵天を飾った輿が作られたりなど非常に出費を伴うため、定期的に行われてはいなかった。他の地区で梵天納めが行われる際は、付き合い村という近隣の集落の行人を招待し、囃子が行列に加わったり、婦人たちが揃いの着物や花笠をつけて踊りながら行列に続いたりなど、大変賑やかな行事となっていた。しかし様々な事情で村内の行人だけで行う

場合もあり、それを朝めし前供養と呼び、昭和六十二年に行われた蔵波地区の梵天納めはこのタイプに属していた。

三山への登拝は三、四日で行われるのが一般的なようであるが、新客が加わった場合は観光を兼ねて各地をまわるため、徒歩で行われていた頃には一ヵ月以上費やすことが普通とされていた。行人が長期間にわたり登拝に出かけている場合、その間は残った家族が安全を祈願するために、陰膳を用意したり、毎朝氏神へ祈ったりされていた。蔵波では行人が帰ってきた際に、氏神の八幡神社へお礼参りをして解散することが一般的となっていた。

多くのタイプは、行が登拝の前行として行われるなど、両者は密接に結びついている。しかし蔵波の場合は

行は三山講祭祀に必要な事柄を習得し、行人としての質を高める性格が強いのに対し、三山登拝は直接神威に接し、行人の位階昇進を得るといった性格が強い。

このように蔵波の行と登拝は、異なった意味を持っていると考えられる。

宮本袈裟雄は、蔵波在住の大先達である鈴木敬司氏に視点を当てている。

鈴木氏が三山登拝を行ったのは昭和十年の三十歳代の頃で、その後は毎年のように登拝し、昭和三十二年に大先達の辞令を受けた。戦前の頃には、年二回の行の他に一夜行や百日行も行ったという。さらに鈴木氏は自宅の神棚に出羽三山の掛軸を祀り、毎晩寝る前に祝詞をあげている。そして昭和五十年以来には、四国八十八カ所・西国三十三カ所を各二回行い、坂東・秩父・最上・小豆島などへの巡礼を行い、人々から依頼があると家屋を建てる場合の地鎮祭、災禍が生じた

時にその原因となった邪気・妖気を抜くなど、除霊の儀礼も執行している。また、蔵波地区では一月十五日にオタキアゲが行われているが、このオタキアゲを始めたのは鈴木氏の提唱によるものだったようである。(宮本袈裟雄 1989)

宮本袈裟雄はこの『天狗と修験道 山岳信仰とその周辺』の著書で、特に出羽三山の羽黒山を中心として取り上げている。しかし筆者は福岡県の出身であるため、本稿では福岡県と大分県の県境に存在している英彦山を取り上げる。英彦山では、

英彦山神宮のTさんに山伏や天狗についての聞き取りを行うことができたので、その様子を次の章にまとめた。

### 第三章 英彦山神社での聞き取り

Tさんは、現在、英彦山神宮で欄直をされている男性の方である。

#### 英彦山町について

多分これはもうあくまできれいな文書とか残ってないんですけど、その五百何年、まあ北魏のお坊さんがここで修行したのが英彦山で一番初めなんですけど、その時には多分もう集落はあったのかもしれないんですけど、で、そこからまあ修験道に発展していくんですよ、英彦山っていうのは、で、その中で多分山に住んでいる人たち結局、山伏になっていくんですけど。

その坊、各いろんな坊があるんですけど、そこでだんだんできてきて、もともとは玉屋神社っていう方法(?)が一番もともとの英彦山の大本なんで。あっちの方に山伏さんたちは住んでた。で、そこから時代が下って行って今の表参道に移り住んでくるっていうのが、本当の流れでしょうね。で、もともと宗教の人たち、山伏さんたちがこの英彦山をつくって行って、で、その後山伏が廃れていくんじゃないですかね、神仏分離で。そしたら町って言われている所は旅館業をし始めるわけ。

炭鉱が栄えた時に旅館になって変わっていくっていう。で、そこに商店がいっぱい集まったから町になっていくんですけども。そんな感じで多分なってるのが英彦山ですね。もともと起源は分からないですね、きれいな起源っていうのは。

もともと山伏の人間が住んで、英彦山が結局生活できなくなっちゃうんで、その修験道廃止令とか神仏分離令で。できなくなっちゃうんで今後、時代が下って行って、旅館業にシフトしていく。もともとなんで坊なんで、いろんな各地域から人が来てご接待してたんで、そこら辺のノウハウはたぶん持つてる。

各坊各坊にその檀家さんがいて、佐賀とか熊本とか鹿児島まで、まあ上だと山口までですね。檀家さんがいたんで、その檀家さんたちが年に一回

英彦山に来た時に、多分、料理出したりとかいうのをして、その各坊各坊でその、まあ今で言ったらお客さんですね、お客さんを持って。で、お宮にお参りに来る。その坊の当主が連れて、英彦山の山頂まで連れて行くっていう信仰形態。

もともと銅の鳥居から上がもう農作物も作っちゃダメっていう世界なんで、山伏さんたちが修行するだけのためにある所。で、なんで銅の鳥居っていう所から下だったら農作物を作ってもいいですよとか、鍛冶屋さんがありますよとか。そういう、まあお産する所とかもちろん、そっちの方になっちゃうんですけども。そういう風な住み分けができてたんですね。鍛冶屋さんがいるんですよ、やっぱり。ちゃんとか、刀鍛冶とか祭具を作る人達っていうのが、今でいう南坂本っていう唐ヶ谷(がらがたに)っていう所ですね。唐ヶ谷の所に住んでた人たちっていう。のびた(のみた)けんしろうだったかな、っていうその歴代ずっと鍛冶屋さんしてる方とか、今も残ってますよ。鍛冶屋はもう辞めてますけど。そうやってずっと残ってて、明治まではしてたはずですよ。

この奉幣殿まではもう完全に山伏さんたちだけが住む世界っていう住み分けで。こっから上になるとまた修行する世界になって、山頂に行くと、そっから上はもう言葉も喋っちゃダメ。山頂、木の鳥居があったんですけど、今はちょっと崩れてるんですけど。そっから上はもう喋ることもダメ、っていう世界っていう。清浄な世界ですよっていうのを皆ここの山伏さんたち守りながら、ずっとしてたっていう。

銅の鳥居があって、その先すぐそこにあるのが石の鳥居なんですよ。で、だんだんだんだん昔に戻っていくんです。木の鳥居が一番上で、石の鳥居があって銅の鳥居があってっていう、その時代をこうきれいに分けていて、山伏さん達の考えた雰囲気作りでしょうね。そこまで考えて、やっぱり昔の山伏さん達はしてましたね。門番とかいたりしてたらいいんで。山伏の人達はその当番を割り当てられる。基本的に警察も兼ねてたし裁判所みたいなこととしてたっていう、このこ英彦山だけでそれをしてた独自のルールがあって、座主っていうのがいて、それが全て命令を発行して。役割を担ってた。火事が多いから茶葉を、敷

地の途中ですね敷地の境目にお茶を植えろとかです。サカキを植えろとかです。そういう風にしてみたい。

### 英彦山の水

ああ、あったと思いますよ。湧き水じゃないですね。いろんなところから山のいろんなところからもう水が流れてて、えっと遠賀川の源流に今えっと嘉麻の方になってるんですけど、こっちからの水も英彦山川があるのでそっから遠賀川に行っちゃうんですね、そこも一つだし、大分側山国川もそうですし、そこでこんど英彦山のもっと上の方に行くと今川です。ね。行橋の方の水源があるんで、多分この山から福岡県の三つの三大河川の水はいってたので、そういうのでまあ五穀豊穡の祈願とかいうのもここになってくるっていう。やっぱり昔の人達は水を大切にしていたんで。で、あこの所はお米が美味しいんです。お米が美味しいんですよ、やっぱ。稲作は大切ですね。

### 山伏と鉱山

常に山にいるんで。鉄鉱石だったりとかっていうのが分かったりもしてたと思います。それでその各大名とかが、その山伏とかと仲良くしようっていうのは、そういう情報が欲しいからなんですよ。

### 山伏と大名

それで〇〇の山伏に限って言えば、結局山口県から鹿児島まで散り散りになっていくわけなんです、何百人っていう山伏がばーって行って、ばーって戻ってくるわけですよ。そしたら九州中の情報っていうのは、結局山伏が里でお話するじゃないですか、いろんな人と。そしたら自然と集まってくるんで情報を握ってて、山伏同士も情報を交換してたっていうのがあったんで、いろんな情報を持つてるのが山伏ですよ。インターネットみたいな世界。英彦山に聞いたらなんかわかるよ、みたいな。山伏に聞いたらなんかわかるよ、みたいな。

やっぱ何があるとか、どういう動きしてる、他の藩がどんな事してるかっていう。分かっちゃうんで。それで情報を持つんで、その情報が欲しくて大名が一生涯命信仰させるっていう。なん

で大名が一生懸命力を入れて英彦山の山伏の気を引こうとするっていうのもひとつ。

そんで戦いになれば、山の中駆けてるんでいろんな所に行く最短距離を知ってるわけ。そしたら案内してもらえればいいわけじゃないですか。仲良くしてれば。案内してあげるよって言われればもう最短で行けるわけですよ。

なんでどこも修験がある所ってだいたいそういう大名。熊野もそうですし、出羽三山とかもそんなんで。そうやって信仰して、表上は信仰なんですよたぶん、まあでも情報のやり取りっていう。が、あってたんだろなあ。

### 先祖が山伏

(人口は)何百人、やっぱいたと思いますね。今もう子供が小学生がいる所ってどこもいないんですよ、英彦山。で今あの60代くらい団塊の世代の所はやっぱ結構いたみたいで。

やっぱその英彦山の住んでる人とかは結構いますけどね。なんで名字がない。ないんですよ、山伏。お坊さんと一緒ですね。名字なしで、ぼん、と。なんでずっとそうやって継いでいって、で明治で名字を名乗りだすとかですね。そんで昔の、今という過去帳みたいなのがあるんですけど、お宮に。そんなのもやっぱずっともう名前だけです。古い人は。そんで明治からみんな名字制になっていくんで。

一番最後まで山伏してたのが、かつばやしさんっていう方ですね。

今、今はえっと、ちょうど小学校の所、参道がこう走ってるんですけど、一番上のしょうりん坊っていう坊があるんですけど、その方がずっと山伏してて、でそれから神主でここで勤めましたね。もう去年、去年か一昨年亡くなられたんですけど。その方が一番最後の山伏だったはず。昭和二十何年とかじゃないですかね、四十年までしてたかな。

### 英彦山神宮と高住神社の関係

今は別々なんですけど、昔はあそこ高住神社っていうのも豊前窟っていう山伏が修行する窟の一つだったんですね。で、その窟があって英彦山の山内に、何か所だったかな、何か所かちよっ

と忘れてた、全部で49か所窟があるんですよ。四十九窟あってそれの中のひとつっていうだけでね、今はもう綺麗に別々。今高住神社さんしてるのは伊田の風治八幡宮さんの所が今されてて、その前こし始めたの五年くらいですかね。その前まではこっちが兼務社っていってお宮をふたつ兼ねててしてたんです。

### 神仏分離令の後

もう無くなっちゃうんで、一部の山伏さん達はお宮ですね、神社に勤めるっていう事ができたんですけど。神社もその時は国家公務員と一緒にだったんで、このお宮には何人っていう規定があるんですよ。ここには何人っていうのが分けられて、全員が全員雇えるっていうわけでもなくて。で、他の人達はもう下って違う商売をするっていう風になっていくんですね。食べていかなきゃいけないので。(今まで銅の鳥居より下に住んでいた人達も上に)一部は住んでますね。一部は住んでましたけど、まあもともと残ってますね、まだ。やっぱ田んぼがあるんで。(銅の鳥居より上に住むのは)なかなかできなかつたみたいですけどね。で、今はもうそんな決まりはなくて、いろんな所から、いろんな所からっていうか、まあ結構小石原から来たりとか、いろんな方が来られてますけどね。

えっとその時は英彦山神社なんで、神宮になったのが昭和54年なんですけども、その前の神社時代にたぶん勤めてる方がいるんですよ。その人達はえっと誰だったかな、まつがいさん、みかわさんとかそこらへんなんで明治の話なんで、その時に神主、神職として。

もうもう綺麗に分かれたんです。もともとはやっぱ山伏さんなんですけど、その人達がここに勤めるっていう。で、宮司が座主になってくわけで、あ、座主、座主が宮司になっていくんですよ。そんでお宮としてはすごい歴史が浅い。明治からしかないんで。その時以前の修験道の時代の方が長くて、ずっとお宮っていうわけじゃないんですね。修験っていう山伏さん達の世界ですって流れてきてる。

もうもう普通の仕事をしながら、そのえっと今まで生きてた檀家さんが来た時に接待をするっていうぐらいしか多分できてなかったと思いますね。

で、来た時に一緒にお宮まで連れて行ってお参りをするっていう。お参りするって言うてももう、国家神道になっちゃうんで、国家神道は今の宮みたくにその家内安全だとか商売繁盛とかそういう祈願をしちゃダメなんですよ。もう国家の安泰だけを祈るためにあるんですよ。国家神道、まあ国の配下になったお宮って。なんでここの英彦山神宮もそういう形態ですね。戦勝祈願だったりとか、この国からのお達しが来て、それに対してお参りするっていうのが。それしかしちゃダメなんで、お葬式もしちゃダメだし。みんなの、まあ国家安泰しか祈れないっていう。で国から、公務員と一緒に国からお金が出て。ていう生活、神主はですね。そんでもう普通の山伏さん達は、連れてきても結局そういう祈祷とか祈願がないんで、だんだん来なくなっていく。そしたら衰退していく。で山伏が生活できない。で仕事しなきゃいけないんで里に下りた方が仕事しやすいんで。

### 真言宗と天台宗

(それで)ここが空き家だらけになっていくっていう。で、今英彦山にあるものが、えっと豊前坊院天宮寺さんっていう所と、あともう一個ですね、高野山真言宗の住職さんから一人、五年くらい前に住み始めたんですかね。天宮寺さんはもともと英彦山の人だったんで、天台宗のお坊さんされてるんですけどね。で、ここの山ももともと天台系の山だったって、その聖護院と戦いがあったんで、その時に天台系っていう、えーと天台宗別格本山っていう称号をいただいでるんで。江戸時代の話ですね。江戸時代に徳川幕府からそういう風に名乗って良いと言われて、天台宗別格本山英彦山派ですね。で天台の山だっていう。でも山の中見ると、真言も入ってるんで南無大師遍照金剛って書いた大きい石とかですね、だから金剛大師が来て、まあ梵字っていうのを念力で作ったんだとか、衣が池っていってお大師さんが来て衣を洗った池があったりするんで、たぶん天台宗と真言宗の戦いがちょっと垣間見えるんですよ、そこには。(それで)両方たぶん混じってたのかなっていう。そんでその坊によって多分、師僧、まあお坊さんの師匠ですね、がいると思うんで、たぶんそれが天台宗だったのか真言宗だった

のかっていう。なんで、その天台宗であって、その印とかその作法っていうのがまた変わってくるんですよ。でその真言宗とか天台宗の中でも何流っていうのがたくさんあるんで、各坊各坊いろんな作法をしてたのかなっていう。

今でも天台宗でもたぶん十何種類宗派があるはずですよ。比叡山の天台宗でもいろんな種類があるんで。法曼流とかですよ、西山流とかいろんな種類があって。真言宗はもう、高野山真言宗があって真言宗があって真言宗何々派とかいっぱいあるんで。

やっぱ一つ一つ違いますね、その護身法って言うてこう、こうやってこうする印があるんですよ。その作法が違ったりとかですよ。』

### 山伏と天狗

いろんな諸説あるんですよ。そのなんか一説にはそのロシア人がいて、それを見た日本人が、酔っぱらったロシア人を見たんじゃないですかね。で、鼻が高くて赤い、でおっきいっていうのを見て、ああなんだこいつは、見たことない人種に出会うわけなんで、そういうので天狗って間違えたりとか、まあ高住神社の方だと、その英彦山に天狗落としとか言って、どーんて急に晴れた日になったりするんですよ。そういうので、それにびっくりして天狗が落ちるとかですね。そういう話は残ってるんですけど、あんまり天狗に関してが綺麗には残ってない。で、天狗まあ山伏を見て天狗と思った。まあ山ばかり駆けてるんで、その修行してる人達って、人よりも身体能力が高くて。力を持ってる。そんで天狗って間違えられてきたのかな。

天狗の定義が一本下駄だって。一本下駄は理にかなってるって言うてましたね。山登りと常に水平に歩けるっていう。こう坂道で、昔の人ってその下駄履いてた時は、登りの時は前の歯を取って登ってたとか。付け替え可能だったんで。水平になって、そしたら歩きやすい。なんで一本下駄だったらそれ(歯の付け替え)が必要ないんで歩きやすいらしいですけど。試したら足くじきました。難しいんです。高くなれば高くなるほど、厚みが細くなれば細くなるほど難しいんです。

一本下駄僕も買いましたからね。ちょっと履い

てみようって。階段降りるのがやっつ。こわかった。止まるのが難しい。歩き続けるのは楽なんです、走ったり。止まってピタって止まるのが難しいんです。

そうですね。不思議な体験とかで、まあ修行されてる方は天狗に連れられたとか、そのだんだん修行していると幻覚を見るんですよ。極限になっていって。極限になっていくと幻覚を見ていって、その天狗に連れられていくとかですね。という話は聞きますけどね。そしたらその先にお祀りしてるお不動さんがあったりとか、そういう体験をされているっていうのは聞きますね。幻覚です。もうたぶん幻覚なのか本当なのかわかんないんです。でも僕が見えないんで。見えてたら、ああそれ本物だよって言えるけど、見えないんで。たぶん幻覚ですね。

まあなんて言うんだろうね、すごいなんか飛躍した信じられないような話とかはありますよ。求菩提(1)と英彦山にこう足をかけて天狗が。すごい大きい天狗がいるっていう。どうやって見たんだろうっていうぐらい。

大きすぎて分かんないのかなっていう風に解釈をして。あ、見えないんだ大きすぎてその他全部が捉えきれないんだっていう。

修行が足りないんだなって。(修行しているから)見えるんだろうっていう。

たぶん(天狗は)架空の話なのかな。はたまた本当にロシア人なのか。やっぱ顔赤くて山から出てきたら、おうってなったのかなって。本当に多分青い天狗とかこうあるのは多分飲み過ぎた人なのかなっていう。もうペロペロだっていう人なのかな。赤い天狗と青い天狗が分けられてたのかなっていう。そう、(もしそうだったら)ちょっと楽しいな。

わけのわからない言葉喋ってるしっていう。通じない。なんだろうこいつは。

妖怪です、まさに。でかいし、ってなったのかなって思いながら。

英彦山も天狗の中で結構えらい方に入っちゃうんですよ。どこだったかな、ああ石鎚山にその一覧表があるはずですよ、天狗の一覧が。あ、何番目だっていって。比叡山とかはあるのかなって思って。比叡山ありそうな感じですけどね。比叡

山とうちがけっこう似たようなところなんですけど。まあ西の比叡山を目指すんだってなって、ここの山伏さん達はしてたみたいです。それで、学堂坊っていって学問をつかさどる山伏さんとかですね。結局、座学勉強する所でもあったし、お坊さんの養成所みたいな感じだったっていうのも英彦山の山伏さんの一つの仕事だったみたいです。その輩出するっていう。

で山といえば比叡山になってるんですけど今、広辞苑見たら比叡山のことをさす、山伏さん達の英彦山山伏の衣装っていうのは、山って書いてるんです。紋があるんですけど、そういう。それが英彦山山伏だっていう証。(衣装)のところにこう山っていう字が書いてあるんです。だって山といえば英彦山だ。比叡山でいったら比叡山のお坊さんが山といえば比叡山だ。じゃあ50年後そこに並べるようにしますわって。広辞苑に載ったら大したものでしょって言って。広辞苑には山って引いたら比叡山って出てくるんです。山といえば比叡山。やっぱ比叡山だなって思って。すごいな一って。

## 英彦山の鬼

まあでもここに鬼の伝説はあったんですよ。もともとが材木石っていう所とか、まあ鬼杉っていう杉があるくらいなんで。その鬼が住んでたっていう伝説はあって。鬼を追い出すために神様は鳥の鳴きまねをするんですけどね。神様なかなか嘘つきなんだっていうお話なんですけど。

一番鶏が鳴くまでに家を建てろっていう約束をするわけですよ、鬼と。悪い事するんで。これ以上悪い事をするんだたらって言って、神様と鬼が話し合っ、家を建てて一番鶏が鳴くまでに建て終えたら、ずっと住んでもいいぞって。

でも鬼はその要求を呑むわけですね。呑んで建てそうになるわけです。もうすぐ建つぞっていう時に、神様やばいって思って、バサバサバサってしてコケコッコって言って、鬼はそれを信じて、あっもうダメだって言って逃げていく。あ、もう住めないもう出て行くしかないって言って出て行った。

鬼ちょっとかわいそう。鬼のイメージがちょっと変わるんですよ。あ、純粹なんだ鬼はって

う。神様もどちらかという悪い人になっちゃうんですよね。

(天狗と鬼が関係あるっていうのは) あんまり聞かないですね。天狗は天狗で、鬼は鬼みたいな感じですかね。

### 英彦山山伏の生活

基本(英彦山に)住んでる。住んでて、まあ檀家回りって言って結局山に入って修行しているんな事を力をつけて、その里に下りていくわけですよ。里に下りて行って加持祈祷していくわけ、で薬売ったりとかして、その生計をなりたてるわけですよ山伏って。でそこで食べ物貰ったりとか、それでだいたいこう出てたんじゃないのかなと思いますけどね。

加持祈祷しながら生活をしてる。それでまあ当然訪問があるんで、それで生活を成り立たせる。で、まあ松会行事っていうのにその各坊が持っている檀家さんを連れて行くという事ですね。そういう形で生計をなりたてた、のが山伏の生活でしょうね。それで今で言ったら医学の知識があつて、空見て天文学とか占い師的なこともしてるし。

すごいいろんな知識をやっば持ってみたい。それで野草を取って薬にしていって、山伏が歩いた後には草が残らないとか言うくらい。あー、これ何の薬になるって言ってむしりながら、奥駈(おくがけ)って行って歩いて行ったりしてたみたいですよ。賢かったんですかね。そうですね。やっばそういうのも(警察や裁判官の役割)ちゃんとしてたんだと思う。やっば山伏なんで、けっこう武力的にもあつて、大友宗麟とかと戦ってるし、とかそういう戦いの戦場にもなってるんで、勝っちゃうんです。大友宗麟全員勝って、負けたから大友宗麟、まあ英彦山も〇〇島津とか細川とかいたんで、それでまあ戦に勝って、で豊臣秀吉の九州征伐まあ足がかりがその戦いからなんですよ。それで負けちゃったんで豊臣に泣きついて、九州征伐の口実ができちゃって九州征伐になって豊臣が入ってきて寺領を没収される英彦山を。

それでまあ信仰はあったでしょうから。山伏がいっぱいいる時ですね。それでいろんな大名とかも信仰してて、まあこの奉幣殿今建て替え中なんですけど、これも細川忠興ですね、1616年に

建て替えてるので、その時にこれだけの物を奉納するので。どうやって建てたのかも分からないんですけど。まあ木はどっかから切り出しても、それでも運ばなきゃいけないんです。

### 現在の英彦山山伏

毎月第一日曜日にこの英彦山の山を徘徊って言うってお参りしながら窟をこう回って、お参りして修行してるんですよ。その人たちって。それで11月3日と4月の第二日曜日の翌日、第二土曜日の翌日ですね、に、護摩焚きって行って斉燈護摩っていう護摩を焚くんですけど、あんな絵みたいな写真みたいな。それをするのに来てますね。それでこの護摩焚きっていうのが、その奥駈って行って、春が英彦山から宝満山まで歩いて行くんですけどね。で昔の山伏さん達はそこから戻ってきてみたいなんですけども、1週間くらいかけて、三日三日六日間で行って戻ってくるっていう修行がある。で秋が今度あるんですけども、今は皿倉からこっちに来るだけなんですけど昔はたぶんこっから、福智山に行って戻ってくるっていう。

(福知山は)北九州の方ですね。ていう、その山を歩く行がお参りしながらなんです。で最後の仕上げがこの護摩焚きっていう、その自分たちがつけた、修行して身につけた力でその人たちの願いを叶えましょうっていう。簡単に言うとそういうのが護摩焚きになってくるんですけども、今はですね。そういう形で今してますね。

それで本当だったら修行が終わってそこから里に下りて、その加持祈祷していく。それでえっと、だいたいこの奥駈行っていうのは新しい、その新人山伏を連れて行くわけです。で、この奥駈行に何回、まあ十何回参加しましたっていったら山伏の階級が一つ上がるっていう、もう階級も綺麗にわけられてるんで。そういう風に。そんじゃあ何回行ったんで貴方、先達ですよとか。先達して何回登ったんでそんじゃあ大先達ですよっていう。そしたら今度、神輿かきとか松会行事っていうものを役をこう、わけていくわけですよ。上でへいをきって下さいとかですね、へいきりです。神幸祭の神輿の担ぎ手ですとか、いうのが全部割り当てがあつて決められていく。で、山伏さん達ってここでの祭事もしながらお金も出すっていう。

で、その松会行事っていうのを綺麗に行っていくっていう。

(現在山伏の人は) 普通の人です。農協で働いてたり、北九州で働いてたり。

北九州とか福岡で働いたり。もう少ないですね、十何名くらいですね。とか、そうですね。まあけっこう道を外れた方とかですね、けっこう来られる。なんか悪い事を、ずっと悪い事をしてるんで、悔い改めて修行して自分を変えていこうっていう。なんで山伏さん達ってけっこうそういう方たちも多い。

なんかのきっかけで改めなきゃいけないって思って、そういう道に入ってくる。やっぱ歩いて来て、きつい思いをして帰ってっていう。どうにかしようっていうね。そういう人たちの方がけっこう信心深いですね。そんで、一時期来てた熊本の方とかまさにそうですね、ヤクザの組長してて。組長、組長してて。もう見た目も怖いし、うわっていう人だけど、でも自分でそうやって組を捨てて修行して、で山伏で飽き足りず、えーっとどこに行ったんだっけか、高野山ですね。高野山真言宗で修行して、でもう今僧侶なってますね。お坊さん。でその、やっぱ若い、自分よか若い子がいっぱいいるじゃないですか、やんちゃなのが。その子たちに教を説いたり。

なんでそういう方たちも結構やっぱ山伏さんたちにもおられるし。まあ洋服脱いたら綺麗な、あっていう、美しいでございますなんていう方もおられるし。

前はたぶん、前もあったとは思んですけどね。まあ英彦山に限ってはたぶんそういう人達(道を外れた人)は入ってないですよ。やっぱその世襲制みたいな感じで坊の家に生まれてっていう感じですね。なので来たのがたぶん1300年代が世襲制になってくるんだと思うんですよ。その前まではもうたぶん所帯を持つことも禁じられてたと思うんで。そのどっかからか拾ってきてとか修行して。弟子としてそれから育てていって坊を譲るっていう形をとってたんじゃないのかな。そこらへんが大友宗麟が焼き討ちしちゃったんで残ってないんですよ。たぶんそういう形でしたと思うんです。そんで代を継ぐようになったのはたぶん1300年代、座主が京都から来てからだとは思んですけどね。

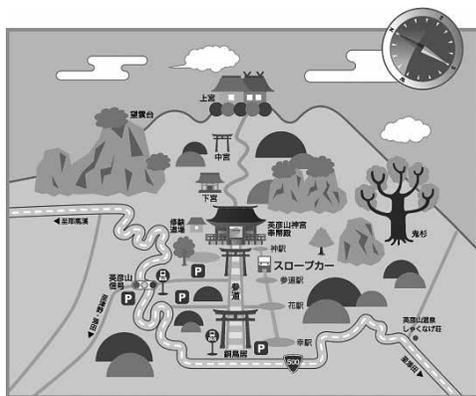


図4 英彦山神宮参道



図5 英彦山神宮奉幣殿

これらの聞き取りは中野卓『口述の生活史 或る女の愛と呪いの日本近代』を参考に記した。

## おわりに

英彦山での農家や鍛冶屋など一般の方々と山伏の生活範囲が、銅の鳥居を境界として住み分けられていたか分かった。

また、現在の英彦山山伏と神仏分離令以前の山伏の修行や生活の違い、どのような方が何故山伏になったのかなど、貴重な話を聞くことが出来た。

調査前の山伏へのイメージでは、修行の際などに坊に通っている、一般の方々も山伏も共に町の中で生活しているというものであった。しかし、実際に話を聞いてみるとイメージとは異なっていた。山伏は山伏のみで町全体の役割を担い、一般の方々とは生活形態が完全に異なっていた。

天狗についての話は諸説あるが、山伏を一般の方々から見ると、山伏が修行で鍛えられており、そのため山野を駆けている際に天狗のようだと考えられていたのではないかと。

## 注

- (1) 求菩提山も修験道が栄えていたが、今回は英彦山を取り上げた。

## 引用文献

- ・宮本袈裟雄 一九八九年 『天狗と修験者 山岳信仰とその周辺』 人文書院 p.10、14-15、149-151
- ・勝俣隆 平成十七年「天狗の古典文学における図像上の変化に関する一考察 ー烏天狗から鼻高天狗へー」『長崎大学教育学部紀要. 人文学部』 p.1-8、10-12
- ・大学教育学部紀要. 人文学部』 勝俣隆 平成十七年
- ・『郷土ものがたり』 福岡県 昭和五七年
- ・『求菩提山 私の修験ロード』 重松敏美 平成十八年
- ・『添田町史 上巻』 添田町史編纂委員会 平成四年
- ・『天狗の末裔にへ 秘境・求菩提を探る』 星野慶栄 昭和四四年
- ・『秘境 求菩提』 重松敏美 昭和四四年
- ・『英彦山』 朝日新聞西部本社 昭和五七年
- ・『山伏まんだら 求菩提山修験遺跡にみる』 重松敏美 昭和六一年

## 図版出典

- ・図1、プロメテウス 天狗  
<http://prometheusblog.net/2017/07/30/post-5827/>
- ・図2、タウンニュース 日印国交樹立60周年・写真展  
<https://www.townnews.co.jp/0608/2013/02/16/176954.html>
- ・図3、コトバンク 天狗  
<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E7%8B%97-102256>
- ・図4、英彦山神宮ホームページ  
<http://hikosanjingu.or.jp/info/>
- ・図5、英彦山神宮奉幣殿 アクロス福岡  
<https://www.acros.or.jp/magazine/tatemonokikou10.html>

## 参考文献

- ・『口述の生活史 或る女の愛と呪いの日本近代』 中野卓 一九七七年
- ・『添田町史 下巻』 添田町史編纂委員会 平成四年
- ・『天狗と修験者 山岳信仰とその周辺』 宮本袈裟雄 一九八九年
- ・「天狗の古典文学における図像上の変化に関する一考察 ー烏天狗から鼻高天狗へー」『長崎